によつて曲げられることが多く、用材としての利用価値は高くない。森林開拓の傾向も次第にみられるが、中でも斜面の凹地は果樹栽培地として最適である。台地と斜面地の上には農業集落が各数ヶのずつ存在する。

谷底平地の8割は水田と集落によつて占められる。水田はすべて1毛作田であり中4割は湿田であつて反当収量は低く、専ら自家用の飯米確保のために当てられている。灌漑水は専ら溜池と天水に頼つているが、水不足はしばしば深刻である。谷底平地上の畑は一般に島畑又は根畑である。

海岸平地は高位面は集落、低位面は荒地が大部分を占める。集落は前述の低い海岸段丘に載つており、集落立地後の隆起運動を物語つている。集落の性格としては半農半漁的であるが、漁よりはむしろ農の方に力が入れられている。尚東岸では、低位面が三浦半島の内湾を南へのびる新しい海水浴場の進出地域となつている。この様に各地形面毎にそれぞれ土地利用の様子を異にしてはいるが、全体としてみると台地上の蔬菜畑がこの地域の非常に目立つ景観である。一見大いに景気良く思われるが…台地上では高度の集約輪栽様式がとられている結果、短期間に著しく多量の化学肥料が施用されている反面、地力の維持増進の方策が等閑に附されている傾向がある。その為、蔬菜類の収量や品質が低下したり、土壌の理化学性が不良となつて営農上の問題とさえなりつつあるのである。又恵まれた自然条件に安住し切つてしまつて進取の気性に乏しい事を痛感する。この様な時に他の蔬菜地帯がより合理的な経営方式を採用して市場競争にのり出してきたならば、この地帯は敗北の憂目に会うかもしれない。「三浦半島南帯を近効農村地帯として眞に発展させる為には、農業改良普及所や農業高校の指導者に任せつきりではなく、個々の農家がまず技術上、経営上の問題と取り組みその解決に向つて努力しなければならないであろう」と果てしもなく拡る大根原を歩き乍ら考えた事であつた。

秦野盆地南部の地形と土地利用

岡　久美子

○今回の調査目的は、地形面と土地利用の対比にある。この場合土地利用に影響を与える factor として地形の外に、気候、地質、地下水等をも合わせて考慮した。関東地方において、当目的に合致する地形を持つ地域として、秦野を取り上げた。これらの地域全体を調査地域にするとより合目的な調査が行えると思つたが、時間と労力の限界から、当秦野を二分しその南部を調

査地域とした。

○秦野盆地は、丹沢山麓の陥没により生じた陥没盆地で、周辺の山地から運搬された砂礫と富士箱根の火山噴出物により、堆積が行われた。その後この地域は地殻変動をうけ盆地の南縁を限る大磯地塊と分離した。盆地内部の砂礫は大部分が御坂層の破壊されたもの、大磯地塊は北縁を断層崖で秦野盆地面と限り西縁もまた北西－南東に走る断層崖をもつて、酒匂川の沖積地に臨む。丘陵地の表面は大体南東に緩傾斜し、表層は大部分火山堆積物で覆われている。周辺の山地はいずれも御坂層により構成され、その大部分は海底で堆積されたと思われる。

○秦野は、神奈川県の西部、東京の西80Kmに位置する。調査地域の西北部は、中郡西秦野町、東南部は秦野市南地区にあたる。交通路線としては盆地南部を小田急線が貫通する。その外小田急線大秦野駅を中心にバス路線が発達し、周辺都市と連絡している。両地区とも農業を産業とし、農業人口比は西秦野町で6割、南秦野地区で4割となつている。農業においては畑作が主であり、中でもたばこは過去数百年間農家経済の主軸であつたし現在も同様である。

○地形分類－地表面の形態と、土地利用との関係を明らかにするという本調査の目的に従つて本地域を山地、扇状地、丘陵、台地の四つに分け更にそれらの地域に介在する地形を独立の地形分類として扱い、亦山地においては傾斜の緩急に従つて細分した。しかしこれら相互の間は判然と一線をもつて仕切り得るものではない。又山腹か山麓かを決める基準も明らかでない。上述の観点に立つた地形分類を次に掲げる。

山　地
- 急斜面
- やや急な斜面
- 山腹緩斜面
- 山麓緩斜面
- 段丘面

扇状地
- 扇状地面
- 扇状地を刻む狭い谷
- 段丘面

丘　陵
- 急斜面（丘陵地斜面の中で特に急なもの）
- 丘陵地面
- 原面のやや保存された平坦面
- 丘陵地を刻む狭い谷及び谷頭平野

台　地
- 台地面

○盆地内の地質は、地下水調査の過程においてなされてきたがなお不明な点

が多く、今後の調査がまたれる。東京震地事務局の行った電探結果によると①ローム層、②砂礫層　③礫交り粘土層　④古期砂礫層　地質斜面図によるとローム層は地域全体に10～25mの厚さで堆積し、その下に砂礫層が10～25m堆積しその下は厚さ10m以上の礫交り粘土層となっている。そして深さ40～50mでは古期砂礫層となっている。

○本盆地で利用している帯水層は二種類ある。才一は普通に使用している掘井戸で、才二は被圧地下水である。山本博士の研究による地下水面までの深さの分布図をみると、周辺部に浅く中央部に深い事がわかる。図の南部、及び小田急線南においては、相当の圧力をもつ被圧地下水の水源が散見される

○地形と土地利用（扇状地）―集落は扇端、扇頂の水の得やすい所に立地する。耕地は大部分が畑地で、たばこ、麦、落花生の作付が多い。水田は扇頂部で伏流する以前の沢水を灌漑水として利用できる地域、及び扇端部の湧泉帯にみられる。（山地）―集落は谷頭平野及び段丘上に立地する。急斜面及びやや急な斜面は殆んど林地でおおわれている。水田は谷頭平野、下位段丘、谷底面にわずかずつ分布する。段丘面、山麓緩斜面、谷頭平野及びそれらを囲む腹緩斜面に分布する。（丘陵）―集落は当大磯丘陵面を刻む小谷の谷底平野、谷頭平野及び原面のやや保存された平坦面上に立地する。水田は同じく谷底及び谷頭平野、原面の保存された平坦面上に分布する。畑地は、東部のゆるやかな起伏をもつ斜面、ゆるやかな断層崖等に多く分布する。

○当地域の耕作景をみると間接的には扇状地、丘陵、山地という地形的制約をうけ直接には水利の問題から水田の分布地域は極限されている。ここでは水利に着目し、水田をタイプに分けそれぞれ地形面と関連させる。当地域で水利に利用している灌漑水は大きく二種類に分けられる。即ち河川と湧水である。

	地形面			
湧水	扇端面	河川	1沢水	― 扇頂面
	谷頭平野		2河の水	― 谷底面，段丘面

尚、湧水は水温が非常に低いため、灌漑水としてはあまり適当でない。

○秦野たばこの歴史は古い、宝永4年の富士の噴火の際、秦野地方は甚大な被害をうけ肥沃の田畑が不毛の地と化したのを、たばこがこの様な土地に適する作物であったところから、農民がきそってとり入れた。明治に入ってから耕作者は、年々増加し、明治31年煙草専売法が施行されてからは本格的に生産が普及した。戦時中は一時、作付が減少したが戦後社会状態の変転に伴い、再び活況を呈してきた。たばこは気候温暖で、収穫期や乾燥期に雨の

少い地域に栽培され得る。地形的には平地よりも、幾分傾斜のある地が望ましい。また圃地の排水が良好な事が必要条件とされる。極端な土壌条件を除いてどのような土壌でも栽培可能であるが、たばこの品質、収穫に好影響を与えるには、A層（溶脱層）の厚さは 20～25m でよく耕耘され、固粒化していることである。農家経済の面からみると、たばこは他の作物に比して反当収益が大きい。一方、一日当家族労働報酬は非常に低い。しかしたばこ栽培の利点は、相対的反当粗収額が大きい事にある。為にいかにつらい労働をしてもたばこを作ることになろう。また専売制の下では、価格が安定しているので当地域の農家経営の中では主作目として機能している。しかし最近では青年層の中に、たばこに対する収益観念が変つてきた。従来重んじられてきた反当粗収益よりも、労働報酬としての収益が有利かどうかを考えるようになつてきた。そのような観点から、蔬菜、養畜等の経営部門とたばこ作との収益を比較してみる時、たばこは決して有利な作物でない事がわかり、たばこ絶対視への偏見を打破する動きがみられる。その結果最近では農家経営、作目等にも変化がみられたばこ作に費す労力を養畜部門へ振り向けようとし、新作目として、果樹、蔬菜を導入しようとする動きがみられる。

武蔵野台地頂部付近の地誌学的研究

岡崎セツ子

地理学科に学ぶようになって一年程過った頃から、卒業論文には「地理」にだけしかできないようなもの（地誌か？）をやりたいと考えていたが、丁度地理教室の方針が狭い地域の地誌ということになったので、結局これを論題にすることになった。

フィールドとしては武蔵野台地扇頂部を選んだ。これは地形的にある程度まとまりがあることと色々な地形が存在していること及び自宅から近距離のところであることなどによる。

フィールドは多摩川が関東山地から関東平野に出るところである。ここには古くから青梅の町が発達し、又江戸と甲州を結ぶ街道がここを通るため一時町はかなり繁栄したというところである。そして多摩川の流れを利用して染色、機業が農家の副業として発達してきたところでもある。

この地域の特徴を幾つかひろつてみると大体次のようになる。

1.扇頂部としての特徴：地形的には丘陵と台地と広い河岸段丘がその主なものである。交通路や集落の配置は扇頂の町を中心として扇端に向つて開いた